

蛇塚古墳発掘調査概報

(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第5集)



1984

宇治市教育委員会

目 次

序	1
1. はじめに	2
2. 調査の概要	3
3. 遺 構	4
4. 遺 物	6
5. ま と め	9

例 言

1. 本書は、蛇塚古墳発掘調査概報である。
2. 発掘調査の組織は下記のとおりである。

調査主体者	宇治市教育委員会		
調査責任者	宇治市教育委員会	教育長	岩本昭造
調査担当者	宇治市教育委員会社会教育課	主事	杉本 宏
調査事務局	宇治市教育委員会社会教育課	課長	小林 巧
	同	文化係長	伊藤忠正
	同	社会教育主事	吉水利明
	同	主事	小西弘子

調査補助員 橋本 稔・奥田耕三・猿向敏一・田中 康・佐原 耕・上田和弘
鈴木静恵・安川優子・宝壁恭子

調査協力者 宇治南陵台5社共同企業体・山田良三（京都府立城南高等学校教諭）
奥村清一郎（京都府教育委員会文化財保護課）

3. 現地調査は、昭和58年6月23日から7月16日まで実施した。
4. 本書の編集は杉本が行い、執筆は遺構を橋本が他を杉本が担当した。整理は、佐原・田中・奥田・猿向・安川が分担した。

序

近年、開発がますます増加の傾向をたどっていますが、本市においてもここ2～3年の開発に伴う発掘調査は、それ以前と比べ著しく増加しております。

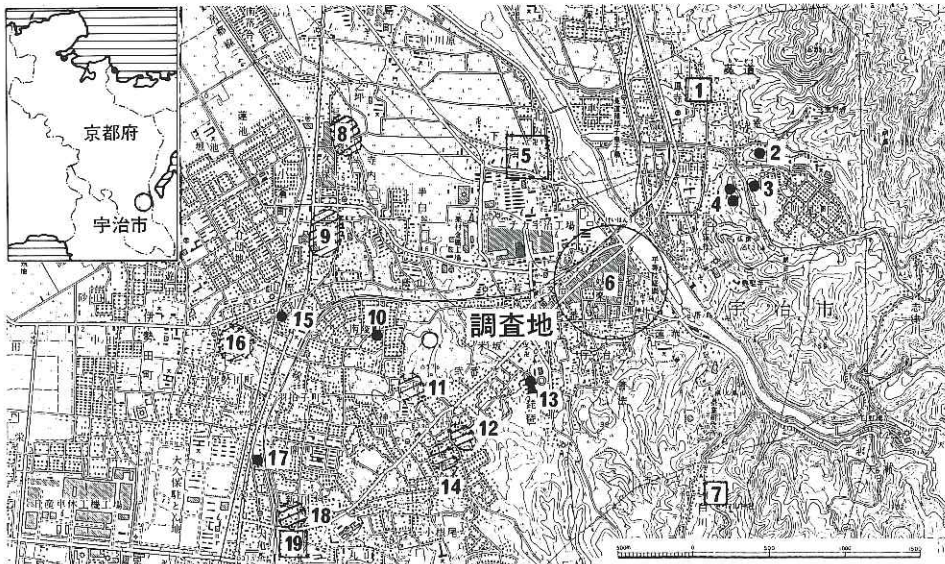
本書は、宇治市教育委員会が昭和58年に実施した蛇塚古墳の発掘調査概報です。この古墳周辺部については、昨年に発掘調査を実施しましたが、今年度も事業者の方々のご理解とご協力を得て、古墳部分の調査を実施することとなったものです。当初めざしました古墳時代遺構につきましては残念ながら発見することはできなかったものの、近世の祠跡が発見され、当時の信仰の一端をうかがうことができました。

最後になりましたが、ご協力いただいた事業者の方々ならびに発掘調査に従事していただいた皆様、本書の作成にあたりご指導・ご協力を賜りました関係機関、関係各位に対し心より感謝の意を表するものです。

昭和59年3月

宇治市教育委員会

教育長 岩本 昭造



調査地位置図

1：大鳳寺跡 2：池山古墳 3：妙見古墳 4：二子山古墳 5：横島城跡 6：宇治市街遺跡 7：白川金色院跡 8：巨椋神社東方遺跡 9：神楽田遺跡 10：御廟古墳 11：石塚遺跡 12：野神遺跡 13：丸山古墳 14：神明宮東遺跡 15：石ノカヲト古墳 16：若林遺跡 17：伊勢田塚古墳 18：一里山遺跡 19：広野廃寺

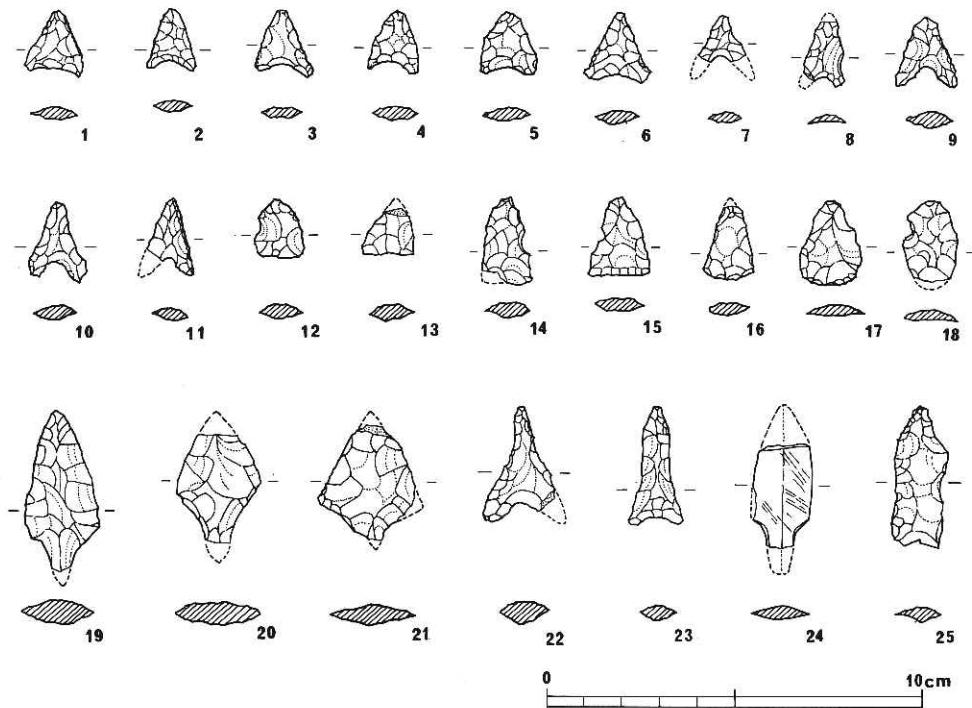
1. はじめに

蛇塚古墳^{ジャツカこふん}は、宇治市宇治天神1番地に所在する。付近には、野神遺跡（宇治野神）・石塚遺跡（神明石塚）・一里山遺跡（広野町一里山）等、弥生前～中期の石鏃を出土する遺跡^{注1}がある。今回の調査地は、これらの弥生遺跡の分布する丘陵の北東部に位置している。

遺跡の発見は、当地域に宇治南陵台5社共同企業体により大規模な宅地開発が計画されたため、昭和56年5月21日に京都府教育委員会から技師の派遣を受け実施した分布調査による。その結果、開発予定地内に池森天神遺跡と命名された古墳時代～近世に及ぶ広範囲な土器散布地と蛇塚古墳とを確認した。

池森天神遺跡^{注2}については、昭和57年3月に発掘調査を実施したが、その結果、後世削平による消滅を確認した。蛇塚古墳については、工事計画の都合上、池森天神遺跡との同時調査が出来ず今回の調査となった。

現地調査は、昭和58年6月23日に着手し、7月16日まで実施したが、悪条件の中、積極的に調査に従事していただいた補助員諸君・作業員の方々に心より感謝の意を表したい。

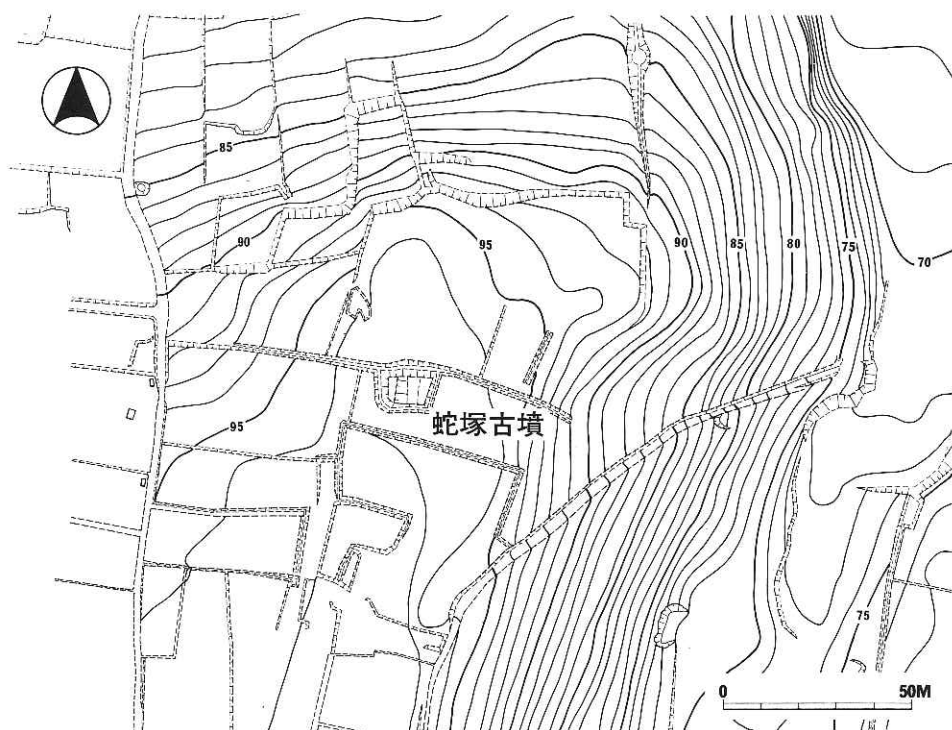


野神遺跡採集石鏃実測図

2. 調査の概要

調査は、現況の測量より開始した。縮尺40分の1、25cm等高線で測量した。測量終了とともに腐植土の排除を行わずは祠跡の検出をめざした。腐植土排除中に狐形の伏見人形・近世陶器片等が出土している。表土排除後、調査前より地割溝部にかかっていた石橋以外祠跡に関する遺構が検出されなかったため、写真撮影後墳丘の調査を行った。

墳丘部の調査は、表土の排除より開始した。表面精査の後も顕著な遺構が検出されないため、墳丘に幅0.5mのトレンチを十字に設定し土層の確認を実施することとした。墳丘は盛土を基本として構築されていることが確認でき、その盛土も一様でないことが理解できた。特に墳丘部の低い部分は大きな土壌を埋めたてている状況が確認できたのでその部分には必要に応じトレンチを拡張し旧地形の復元を試みた。この埋土中からは近世陶器片が出土しており、また、他の盛土部分からも同様な陶器片の出土が見られたことから、当初古墳の残欠かと思われた高まりは近世の盛土によるものと判断でき、調査状況の記録を作成し調査を終了することとした。



調査地周辺図

3. 遺 構

調査地は竹藪の中に幅2m程の地割溝によって囲まれた、東西14m程、南北10m程の長方形隆起である。西・北辺部は高さ1～1.5m程の高まりをもっており他は平坦である。東辺部中央には地割溝をまたぎ石橋がかけていた。

調査は表面精査より実施したが何ら遺構を検出せず、隆起上にある2本の樟の巨木をさけながらその構造をさぐるため断ち割り調査をすることとなった。

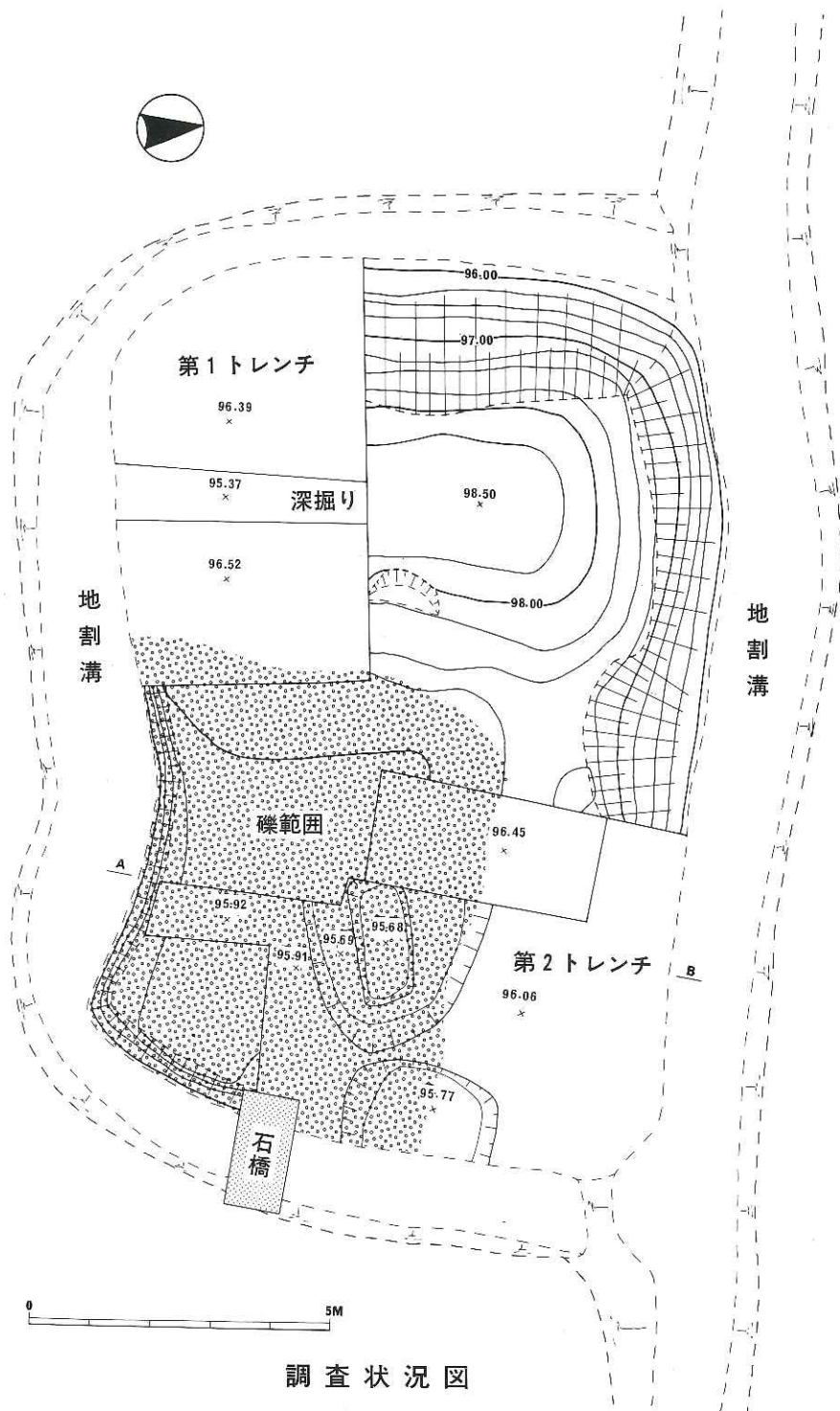
第1トレンチで実施した西辺高まりの土層の観察からは、当初平坦面に高さ1m程盛土がされ、一定時間経過後に再度0.5m程の盛土が実施されていることが理解できた。

第2トレンチでは西・北辺部の高まりに囲まれた平坦部が、東西8m、南北5m、深さ1m程の長方形土壇を埋めため形成されている状況が理解できた。その埋土は大きく下から灰褐色混礫土層・炭層・礫層の順となっており、その上に北辺部高まりを形成する層がのっている。西辺部高まりの2次盛土も同様である。土壇埋土よりは近世土器類が出土している。

以上のようにこの隆起が古墳である積極的状況は検出されなかった。



調査後全景（東から）



調査状況図

4. 遺物

今回の調査で出土した遺物には近世陶磁器を主体に土師器・須恵器・埴輪・伏見人形・瓦等がコンテナ5箱分出土している。

近世陶磁器には伊万理系の椀（11～13・18）・皿（10）、京焼等近隣地域産の椀（3・6）・皿（2）・壺（7・9）、美濃系鉄釉四耳壺（19）、丹波系スリ鉢（15・17）、信楽系スリ鉢（16）等がある。この中で（15・18）は表土中出土であり他は方形土壙埋土中からの出土である。

土師器は皿（1・5・8）のみであり、いずれも方形土壙埋土中より出土している。特に（8）は内面見込みに一条の沈線がめぐるものである。

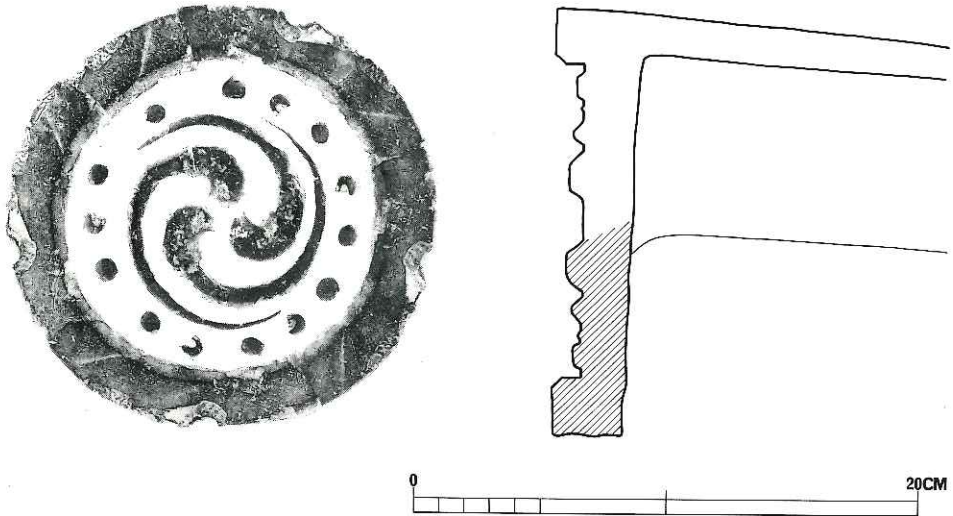
須恵器は甕の体部小片が数点採集されているが時期は不明である。

埴輪は円筒埴輪小片（4）が1点採集されている。

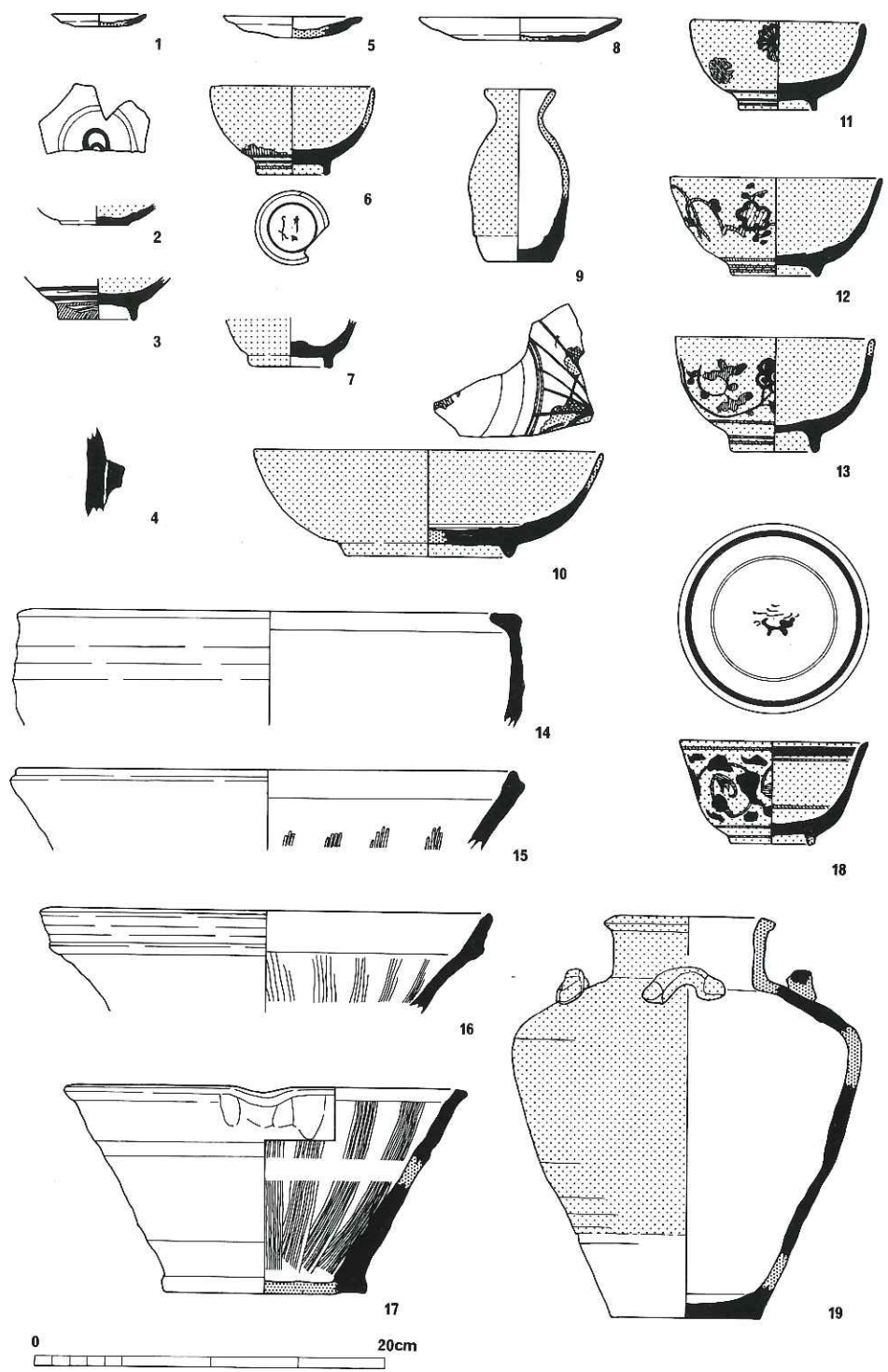
伏見人形は、狐の小判乗りが4個体分表土中より出土している。

瓦は三巴文軒丸瓦を含むさん瓦片が方形土壙埋土中より出土している。

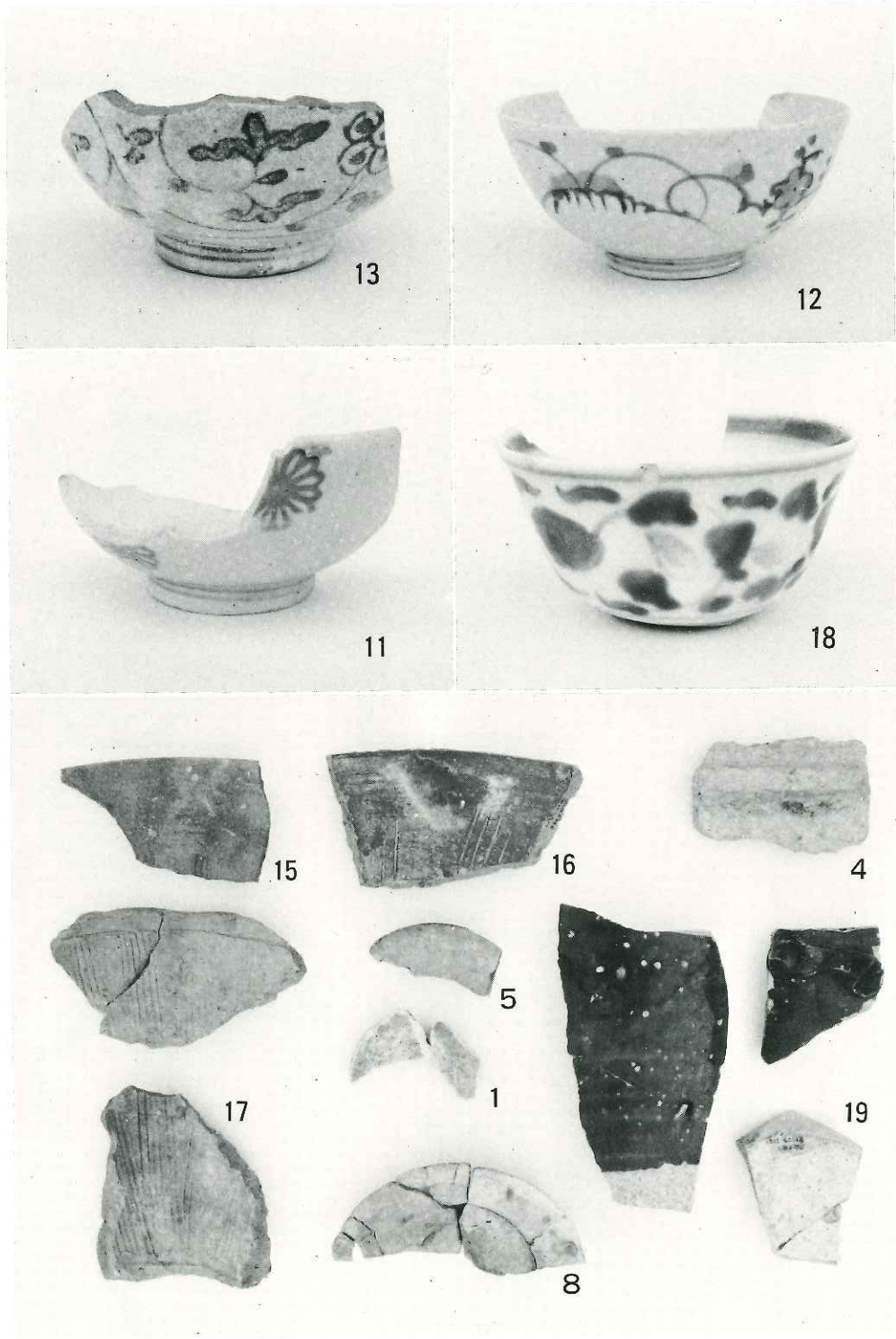
遺物の主体となる近世陶磁器類は概ね18～19世紀に比定できるものである。



三巴文軒丸瓦実測図



出土土器実測図



出土土器写真

5. ま と め

蛇塚古墳の発掘調査は、前年度の周辺地区の調査結果より当初古墳の残欠を予想する中で発掘調査を実施してきたが、すでに概観したとおりその積極的な状況は検出できず、出土遺物、隆起の築造のしかたより近世頃に構築されたものであることが解明できた。

かつてここに祠があったとの言い伝えどおり、調査着手前の状況は祠こそないがその可能性を充分看取できるものであった。また、発掘調査の成果の中でも18～19世紀頃に整地や土盛りが実施され、ここに祠が祭られたらしいことは出土した2対の狐の小判乗り人形から推測することができた。しかし、ここで注意しておかなければならないことは、少量ではあるが、埴輪・須恵器の出土が認められるということである。宇治市の西部、旧巨椋池南部台地上はその開発が古くより進められており、考古学的調査の空白地帯である。また、ここは、南山城最大級の前方後円墳久津川車塚古墳（全長 180m）を盟主とする広義の平川古墳群の最北端部域にあたる。このようなことを考え合わせると、すでに消滅した古墳が調査地周辺に存在していた可能性は高いように思える。蛇塚という地名を初め付近に残る石塚という地名はその痕跡なのかも知れない。いずれにしろ、今後周辺地域の調査に期待したい。

〔注〕

注1 『宇治市史』第1巻、昭和48年。

注2 杉本 宏・吉水利明「池森天神遺跡発掘調査概要」（『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第4集、宇治市教育委員会、昭和58年）。

昭和59年 3 月30日印刷

昭和59年 3 月31日発行

蛇塚古墳発掘調査概報
(宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第5集)

発行 宇治市教育委員会
京都府宇治市宇治琵琶45
TEL (0774) 22-3141

印刷 (有)新進堂印刷所
京都府宇治市宇治妙楽9

489

(表紙) 遺跡全景